令和６年度　平和に関する作文コンクール

■　平和に関する作文コンクールについて

１　事業概要

「非核平和都市宣言」及び「市平和行政の推進に関する条例」に基づき実施するもので、平和な社会・まちづくりについて考える機会を設けることにより、次代を担う中学生の平和についての意識高揚を図ることを目的とする。

テーマ	「平和に関する私の考え」
対象	市内中学校全生徒
応募数	１１０作品
表彰	最優秀賞　１名
	優秀賞　３名（各学年１名）
	佳作　３名

２　入賞者一覧（敬称略）

最優秀賞（１名）

階上中学校	２年	大原（おおはら）　里愛（りあ）	本当の平和とは

優秀賞（３名）

階上中学校	３年	平田（ひらた）　樹生（たつき）	平和について考えたこと
唐桑中学校	２年	千葉（ちば）　彩生（あおい）	私が考える平和とは
新月中学校	１年	菅原（すがわら）　壱太（いった）	平和について考えたこと

佳作（３名）

大谷中学校	３年	佐藤（さとう）　煌（きら）	平和な社会を目指して
唐桑中学校	３年	鈴木（すずき）　百々（もも）	戦争について私が考えたこと
唐桑中学校	１年	江畑（えばた）　風花（ふうか）	当たり前の日常

■ 平和に関する作文コンクール入選作品

【 最優秀賞 】

題　　名	本当の平和とは
学校名・学年	階上中学校　２年
生　徒　名	大原　里愛

平和とは、何でしょうか。平和を保つためには、何が必要なのでしょうか。その答えは、人によって違い、また簡単なものではありません。

私は今年の９月、英語暗唱大会に出場することになりました。暗唱する題材を選んでいた時、広島に投下された原爆の物語を見つけました。

原爆が落ちて、一人取り残された幼い男の子のために、見ず知らずの女の子が、必死に子守唄を歌い続けるお話です。

女の子は、泣き続けた男の子が亡くなったその後も、子守唄を歌い続け、とうとうその女の子さえも死んでしまうのです。

とても悲しいお話ですが、これは本当に起きた出来事が物語になっており、原爆によって何の罪もない子供や沢山の市民の命が失われました。

この出来事を私たちは決して忘れてはいけません。原爆がどれ程悲惨な事か伝え、二度とこの様なことが起きないよう、必ず未来に繋いでいかなければならないのです。

しかし、今でも世界では戦争が起きています。平和や自由、何かを理由に正義を掲げても、やっていることは平和とは全く異なります。

毎日のように人が犠牲になり、物が破壊され、ミサイルや銃声に怯える日々。一体なぜ、関係のない人たちの命が奪われるのか、世界が地球保護に関心を寄せる中、なぜ戦争や紛争で破壊しなければいけないのか、どんな理由があろうと、あってはならないのです。

今の日本では、戦争は起きていません。それは、法だけでなく、原爆という事実を間接的に私は知っているからです。

そしてもう一つの理由は、憎しみを伝えないことにあると思います。憎しみの感情からは、憎しみしか生まれません。計り知れない思いがあったはずですが、私は、この様な歴史から憎しみの思いを伝え聞いたことはありません。新たな要因を作ってこなかったことで、未然に戦争を防ぐ思いが、尊く感じられます。

原爆の事実は、私たちが聞く以上に恐ろしく、目を背けてしまうものです。今の私たちにはそれが出来ますが、その場にいた人は、目を背けることも、逃げ出すことも不可能だったでしょう。その恐怖とつらさは想像を絶します。海外の人はなおさら、遠い国の物語のように聞こえてしまうかもしれません。

私は、平和とは、決して何か大きなことをしなければ得られないものではないと思います。そして、実は私たちの周りにはいつも沢山の平和があふれています。

当たり前に毎日を過ごせることや、家に帰ってご飯を食べられること、家族や友達と未来を語ったり、自分を思ってくれる誰かがいたりすること、その全てがすでに幸せで、平和なんだと思います。

ですが、その当たり前の物事に感謝することを忘れ、失って初めて、人は平和や無くした物の有り難みに気付くのかもしれません。だからこそ、毎日を繰り返せる尊さを感じながら、一日一日を大切に感謝して生きていく必要があると思います。

一人一人に戦争を止める力は無いかもしれません。ですが、人が思いを寄せ合えば、例え離れていても出来ることが必ずあります。

今、私にできること、それは、英語暗唱を機会に出会った物語を、精一杯、心を込めて伝えること。

私たちに平和の全ては伝えきれない。ですが、きっと伝わる思いがある。私はそう信じています。

【優 秀 賞】

題　　名	平和について考えたこと
学校名・学年	階上中学校　３年
生　徒　名	平田　樹生

雲一つない空、草木をなびかせる心地よい風、笑い合う友、そんな日々のことを自分は平和だと思っていた。

夏休み前のある日、平和について考える課題が出たことをきっかけに、私の平和についての捉え方が変わっていった。

課題に取り組むにあたって、平和について調べてみようと思い、インターネットや本を頼りにした。辞書には、「平和とは、争いや戦争がないこと」と記載されていた。

色々な意見が知りたいと思い、友達に「平和とはなんだと思うか」尋ねてみた。すると友達は「辛いことも、苦しいこともない生活」と答えてくれた。

最後に、先生に尋ねてみると「難しいね、先生が思うには、平和はお互いの認め合いだと思う。それは、幸せなことでもある。」と優しい口調で答えてくださった。

私は、先生の言葉が一番響いた気がした。心の中に「認め合い」「幸せ」という言葉が残り続け、学んだ知識をもとに、自分なりに「平和」について考えてみようと思った。

一言で「戦争や争いが無い」と言っても少し違う気がした。今では平和主義を掲げている日本も、1950 年に起こった朝鮮戦争では、日本に大量の軍需品の注文が入り、好景気に恵まれたことがあることを授業で学んだ。平和や幸せの捉え方は様々であり、時代や立場によって異なっていくことを感じた。

こうしたことに、先生が話されていた「認め合い」や「幸せ」を重ねて考えると、何かが見えてくるような気がした。

平和とは、それぞれの「幸せ」を認め合うことであり、それを否定することが、争いにつながるのではないだろうか。

「平和」という言葉には、たった二文字では表しきれないほどの意味や考えが詰まっているからこそ、考え続けなければいけないことなのだと改めて思った。そして色々な視点にたって、物後を見ることの大切さにも気付いた。

「平和とは何か」今の自分の結論は、「人の幸せを認め合うことこそが平和につながり幸せを生む」ということだ。

これから私の考えは変わるかもしれない。もっと様々な視点を持てたとき、考えが深まっていくかもしれない。

「平和とは何か」「どうすれば平和になるのか」私は問い続けたい。そしてこれからも自分にできる「平和」を一歩ずつ実践していきたい。

【 優 秀 賞 】

題　　名	私が考える平和とは
学校名・学年	唐桑中学校　２年
生　徒　名	千葉　彩生

パリ・オリンピックが幕を開けた。欧州や中東で戦争が続く中で。

近代オリンピックを最初に始めたクーベルタンは19世紀の末に、戦争で敗れた自分の故郷の若者を勇気づけるためには、スポーツによる教育が必要だと考えたという。

相手に対し敬意を払い尊重し合ったり、思いやったりするフェアプレーの心が、世界中の人々をつなぎ止めるのではないか、と希望をもち、スポーツによる平和的な運動を呼びかけたのだ。それがオリンピック精神の原点なのだそうだ。

しかし、ロシアによるウクライナ侵攻は、３年近くも続いており、パレスチナ自治区のガザ地区はイスラエル軍の攻撃にさらされている。また、1978年から断続的に続いているアフガニスタンの紛争やシリアやリビアの内戦など世界中のあちこちで争いが起きている。

表彰台にあがり歓喜の笑顔で胸に手をあて、感謝の気持ちを体現するオリンピック選手の姿がある一方で、今日という日を無事に生きていられるよう、静かに目を閉じ胸に手をあて祈り続ける人がいるのも現実だ。

オリンピックの華やかさとは逆に相手を尊重し合うどころか、攻め合い、殺し合い、悲惨で絶望的な戦下の国があることも目を背けてはいけない事実である。

人間社会でも言えることだが、お互いに歩み寄らないと相手の長所は見えてこない。短所を感じても誰かが補ったり助けたりすることで手を取り合うことができると思うのだ。これは世界の国家間にも通じることなのではないかと考える。

ただ、国家間の対立は、解決が非常に難しいのだ。一定の権力をもって、国と国との争いを止める公権力が存在せず、自分の国の安全は自分の国で守らなければならない。武力を捨てることは難しいのだ。憲法で戦争を放棄している我が国にも自衛隊があるのだから。

私達は、戦争や紛争がなく、世の中が穏やかである平和をいつの時代も祈っているが、戦争のない世の中が必ずしも平和であるとは限らない。社会的戦力や生きる権利の不公平さを考え、状況がバランス良く整うことで、平和を感じていくのかもしれない。

オリンピックの選手がライバルの肩を抱き寄せ讃え合う姿は、平和の姿だと信じたい。

世界中の人々が国境を越え、オリンピックの理想を表出できる国家社会になってほしいと願う。それが、分断の世界を動かす平和へのメッセージとなるように。

【 優 秀 賞 】

題　　名	平和について考えたこと
学校名・学年	新月中学校　１年
生　徒　名	菅原　壱太

私は今、生きていられることは当たり前ではないのだと思いました。世界中の各地では戦争が起こっています。

ロシアとウクライナでは今もまだ戦争が続いています。ウクライナは少なくとも 400 人以上の子供が、死亡したとも言われています。イスラエルとガザ地区の戦争では、学校をイスラエル軍が空爆し、100 人以上の子供が死亡しました。

どちらの戦争も宗教や民族の違いを引き起こした戦争だということを調べて分かりました。これまでの歴史の中でも宗教と民族の戦争が起きていることが分かりました。なぜ、戦争は無くならないのか。それは、お互いの違いを認め合わないからではないでしょうか。では、私たちが戦争を起こさないためには、どうしたら良いでしょう。平和とは、戦争がなければ良いわけではないのです。人々が互いに尊重し合い、協力し合い、安心して暮らせる社会であると思います。

それは、学校でのいじめにも当てはまると思います。自分の考えと違ったり、見た目や行動が周りの人と少し違ったりするだけで、悪口や陰口を言ったり嫌なことをしたりするのは、戦争と少し似ているような気がします。私も自分の行動を振り返ってみると思いあたることがあります。

戦争のない平和な世界にするには、まずは、周りの友達を理解し、そして、仲の良い学級や学校を作り、これまでの、日本や世界の歴史を学習し、これからどんな世界を作っていきたいか一人一人が考えてゆく必要があると思います。

この作文を書いている今日は、８月 12 日です。もうすぐ、終戦記念日です。生きていることに感謝しながら手を合わせたいと思います。

【 佳　　作 】

題　　名	平和な社会を目指して
学校名・学年	大谷中学校　３年
生　徒　名	佐藤　煌

私たちの生活の中で「平和」という言葉は常に重要な意味を持っています。特に日本では、広島と長崎に投下された原爆の記憶が、多くの人々に平和の大切さを教えてくれています。その歴史を忘れないためにも、私たちは今、平和について考える必要があります。

原爆の被害者は、肉体的な傷だけでなく、精神的な悲しみも抱えています。その体験や痛みは、単なる歴史の一部ではなく、私たちが学ぶべき大切な教訓です。

日本では、毎年８月６日と８月９日に広島と長崎で平和記念が行われています。これらの式典では、原爆によって亡くなった方々を追悼し、平和を誓う場となっています。このような行事を通じて、私たちは過去の悲惨な出来事を忘れず、未来に向けて平和を築く努力をすることの大切さを学びます。

しかし、世界は今もなお緊張状態にあります。最近では、ロシアとウクライナの軍事侵攻がニュースで大きく取り上げられています。無関係な人々がその争いに巻き込まれ、命を落とす現実が続いています。

戦争をなくすためには、知識を深め、異なる文化や価値観を理解することが必要です。

私達一人ひとりが、意識して行動することで、少しずつでも平和な社会を築くことができると思います。

また平和教育も注目されるべきです。原爆の被害や戦争の実態について学ぶことは、未来を担う私たちにとって非常に重要です。

過去の歴史を知ることが平和への第一歩となります。歴史を学び、記憶し続けることが重要です。

私たちが生きるこの時代には、様々な問題が山積していますが、その解決には思いやりを持って、自分自身の心の中に「平和」を持つことが大切です。

家庭や学校、地域社会での小さな行動が大きな変化を生み出すことがあります。

私たちの世代が平和を実現するために、何ができるのかを考え続けていきたいです。過去の惨劇を忘れず、その教訓を胸に、未来へ向かっていくことが私たちの使命です。平和の大切さを広め、より良い世界を次の世代に引き継ぐために、平和な未来を築きましょう。

心からの平和が実現する日を願っています。

【 佳　　作 】

題　　名	戦争について私が考えたこと
学校名・学年	唐桑中学校　３年
生　徒　名	鈴木　百々

戦争。誰もが知っている残酷で悲しい争い。なぜそんな争いが起きてしまうのだろうか。

ある日、「８月７日から８月 10 日まで長崎に行き、青少年ピースフォーラムに参加しませんか」というお誘いを受けた。こんな機会滅多にないと思い、私は長崎に足を運んだ。内容としては被爆した方の講話を聞いたり、平和記念式典への参加、全国から集まった中高生との意見交流などだった。

原爆、授業では習ったものの、うまくイメージできない。そう考えているうちに被爆の背景について語られていった。「もし飛行機が来たら目と耳をおさえ、通り過ぎるのをじっと待つ。戦時中、外に出る時の服装は必ず長袖、長ズボンで行きなさいと教えられた。」と今ではどれも考えられないような内容だった。「家族が死んで悲しい気持ちよりも、自分がいつ死ぬかわからない状況の方が怖かった。」私はこの言葉を聞いて初めて衝撃を受けた。私が生まれたのは終戦の後、自分が戦争に遭うことも戦争で死ぬこともないと断言できる社会で育ってきたから。戦争とはそれほど生きることだけを考えて生活していたんだ。自分で考えた時と話を聞いた時でこんなにも言葉の重みが違うのかと実感した。

講話が終わり原爆資料館へ行った。そこでは被爆した当時の長崎の様子が展示されていた。火傷で皮膚がただれた人の写真、熱で溶けた金貨やビン、怪我をして血だらけになった人の服など。原爆の恐ろしさを目の当たりにした。展示されているものが全てではないと思うととても怖くなった。被爆された方はこれを体験したから私たちに伝えようとしてくれたのだと感じることができた。

1945 年８月９日 11 時２分、長崎に原爆が落とされた日。どれほどの人が苦しみ、どれほどの尊い命が奪われたか。私にできることは周りの人に伝えることだけ。伝えることで戦争の恐ろしさを知り、同じことを繰り返さないようにできればいい。

戦争がなくなることだけが平和なわけではない。しかしみんなが安心して暮らせるようになる第一歩のはずだ。その一歩が一歩また一歩となり、世界中に「平和」と「幸せ」が訪れることを切に願う。

【 佳　　作 】

題　　名	当たり前の日常
学校名・学年	唐桑中学校　１年
生　徒　名	江畑　風花

私が考える平和とは、この地球上に住む誰もが、平等に、幸せに暮らせる事が平和だと思う。

今、世界では「戦争」や「自然災害」により、今までごく普通に暮らしてきた日常が、突然奪われてしまう事が起きている。

私自身が、ある日突然、さっきまでの何気ない時間がなくなってしまったら？と考えたら、とてつもない恐怖におそわれた。

戦争は、絶対に起こってはならないものだ。私は、戦争というものは、テレビや教科書でしか目にした事はないが、その残酷さは目をそむけたくなるものだ。簡単に、人や動物たちの命を奪い、そんな事になんの意味があるのだろう。

2011 年３月 11 日、東日本大震災が起こった。戦争ではないけれど、自分の身近でも、さっきまでの生活がある日突然奪われたのだ。

朝、行ってきますと言って、それっきりの人。けんかをして口を聞かずに家を出てしまった人。みんな当たり前に明日が来ると思っての行動が、最後になった人もいる。

本当のところは分からないけれど、戦争も同じようなことが起こっているのだろう。

生まれた時から、紛争地域で過ごしているのであれば彼らにとっては、それが「当たり前の日常」なのだろう。でもそんな悲しい事が当たり前であってはならない。

私が住んでいる日本は、平和だと思う。

安心して眠れる場所がある。食べるものもたくさんあり、おなかがいっぱいになるまで食べられる。学校へも普通に行って、勉強もできる。だから私が今、「当たり前」の生活を送れている事に感謝しかない。

これからも、日本が平和で幸せな国であるために、これから生まれてくる子たちと一緒に日本を守っていかなければならない。そのために私ができる事は、学校で社会や歴史を一生けんめい勉強をし、理解を深めていく事だと思う

二度と同じ事のないよう願い、次の世代に自分たちが伝えられるようにしなければならない。それが自分たちの使命だと思う。

みんなが悲しむ事のない当たり前の日常を送れますように。